

FORUM 2

第2日 10:00 - 11:45
3305教室

あえてシュタイナーのシラー論を語ってみる —「美と教育」再論への一つの試み—

報告：西村拓生（奈良女子大学）
司会：真壁宏幹（慶應義塾大学）

1996年から2005年にかけて、教育思想史学会とその周辺で「美と教育」をめぐる一連の研究が展開された（報告者による『教育思想史コメントール』所収のレビューを参照されたい）。そこでの議論には、「美的なもの」へのポジティブな期待（たとえば子どもの遊びと芸術家の生に通底する「創造的瞬間」について語る矢野智司氏）から、クールな批判的距離（たとえばナチスのプロパガンダ映画におけるメディアと美の連結を分析する今井康雄氏）まで、多様な広がりが見られた。それらを踏まえて、今回のフォーラムでは、しばらく振りに教育思想史学会において「美と教育」に関する議論を提起してみたい。

とり上げるのは、あえてシュタイナー。一方で、アカデミズムにおいてきわめて扱いにくい思想的テクストがある。他方で、「美と教育」という観点からも非常に興味深い実践が100年近く続けられている。この二つに向き合ったとき、思想史研究者には何ができるだろうか？

足掛かりにしたいのは彼のシラー論である。シュタイナーの教育思想の原点には水頭症の子ども家庭教師の体験があったことが知られている。その時代、彼が読みふけていたのがシラーの『美育書簡』だった、というのである。『美育書簡』という思想史上のオーソドキシシー（とはいえ、これまた180度異なる多様な解釈に開かれた謎めいたテクスト）とシュタイナーとの接点から「美と教育」の如何なる位相を語りだすことができるか、試みてみたい。

2011 / History of Educational Thought Society

教育思想史学会 第21回大会 プログラム

2011.9.18 Sun. - 9.19 Mon.
日本大学文理学部

教育思想史学会事務局

〒156-8550
東京都世田谷区桜上水 3-25-40
日本大学文理学部教育学科 下司研究室気付
事務局 E-Mail: hets@chs.nihon-u.ac.jp

Time Table

【第1日】9月18日(日)

- 10:00-11:00 理事会・編集委員会合同会議 **3301教室**
- 11:00- 受付 **3階・エレベータ前**
- 12:00-13:45 フォーラム1 **3305教室**
マルクス主義からマルクスへ
- 14:15-17:15 シンポジウム **3305教室**
共同性/協働性/協同性
- 17:30-18:15 総会 **3305教室**
- 18:30-20:00 懇親会 **カフェテリア秋桜**

【第2日】9月19日(月)

- 10:00-11:45 フォーラム2 **3305教室**
あえてシュタイナーのシラー論を語ってみる
—「美と教育」再論への一つの試み—

※昼食はカフェテリア秋桜(3号館1階)が営業しています(11:00~14:00)。どうぞご利用ください。

- 13:00-16:00 コロキウム **3301教室**
承認と人間形成 **3401教室**
教育学のカノンとしてのデューイ **3402教室**
教育学的「自律」概念の再検討

※コロキウムについては、別紙をご覧ください。

会員控室: **3302教室**

大会本部: **3304教室**

【大会参加費】

会員 : 一般=2000円 院生等=1000円
非会員: 一般=2500円 院生等=1000円

懇親会費: 一般=5000円 院生等=3000円
(懇親会費に会員・非会員の別はありません)

共同性／協働性／協同性

マルクス主義からマルクスへ

報告：青柳宏幸（中央大学・非常勤）
司会：小玉重夫（東京大学）

カール・マルクスは20世紀にもっとも大きな影響を与えた思想家の一人であるといっていよう。にもかかわらず、マルクスに対する本格的な教育思想史研究はほとんどなかったといっていよう。マルクス主義が現実政治における一大勢力であった歴史的状況のなかでは、マルクスに言及することは直ちに同時代のマルクス主義に対する政治的な態度表明として機能してしまい、マルクスを思想史的に対象化することはほとんど不可能なことであったからである。いいかえれば、マルクス主義が一定以上のヘゲモニーをもつ状況のなかで、解釈者自身の態度や考えがマルクスのテキストに投影され、その投影像がマルクスの思想だと誤認され続けてきたのである。それゆえ、われわれは、われわれ自身の理解枠組みを問い返すためにも、マルクスを思想史的に読み直す必要がある。

本発表では、マルクス本人の思想とマルクス主義とを厳密に区別し、マルクスの教育思想の内容を明らかにしていく。そのために、まず19世紀後半のマルクス主義の成立期においてマルクスのテキストと教育論がどのような歴史的状況のなかで結びついていった歴史的過程を検討し、マルクス主義教育思想の前提となっている教育概念を明らかにする。そして、マルクス主義の教育概念とマルクスのそれとの連続性と断絶性に注目しながら、マルクスのテキストを検討することによって、マルクスの教育思想を思想史的に読み解いていきたいと思う。

発表：小国喜弘（東京大学）・山名淳（京都大学）・生澤繁樹（上越教育大学）
司会：田中智志（東京大学）・生田久美子（田園調布学園大学）

「学びの共同体」「学校における協働」「交流及び共同学習」「協同性を育む」といわれているように、共同性・協働性・協同性は、近年の教育実践におけるキーワードである。一般論としていえば、「協働」という言葉は、collaborationの訳語として用いられ、共通の利害関心をもつ人びとが共通の目的のために機能的に協力することを意味している。また「協同」「共同」という言葉は、cooperation/associationの訳語として用いられ、ある人と共通の利害関心をもたない人が、その人の求めに応じ、協力することや、広い意味で力を合わせることを意味している。これらの概念は、共同体（community/Gemeinde/communaute）という、19世紀以来、近代教育学でたびたび語られてきた概念とどういう関係にあるのだろうか。このシンポジウムでは、近代教育学の共同体概念と、近年の共同性・協働性・協同性概念の異同を念頭に置きつつ、これらの概念のすそ野を、報告者それぞれの視点から、教育思想史的に掘り、その含意を確認したいと思う。

開かれた学校づくりについて、保護者、地域、教師、生徒の協同は論じられるが、行政担当者はあくまで排除されている。また授業の内容に踏み込んで保護者と教師が協議することもほとんど視野に入っていない。こうした現実には、国民の教育権論が形をかえて機能し続けていることを暗示しているのではないか。表題のテーマのもと、国民の教育権批判について、思想史的に考えてみたい。（小国喜弘）

教育思想史研究は、共同体を志向し、また警戒するという、アンビバレントな態度を示してきた。そのような態度は、今日にいたるまで保持されているように思われる。本報告では、共同体というテーマにとって重要と考えられるアジール論を軸にして、新教育批判に含意されている共同体批判の批判的検討を試み、そこから翻って、「協働」および「協同」の可能性を論じてみたい。（山名淳）

政治思想史と教育思想史における「共同」の創出の仕方や「共同体」をめぐる語り方のズレ、あるいは「協同・協働」に対する温度差などにスポットを当てて考察してみたい。そのさい、古典的な近代契約論を踏まえつつも、原初状態から人びとの合理的な応諾を「共同体」の基礎におくロールズや、「経験」というある種の直接性に由来する「協同」を論じたデュイに、改めて論究することになるだろう。（生澤繁樹）

承認と人間形成

企画：藤井佳世（鎌倉女子大学）

司会：池田全之（お茶の水女子大学）

報告：Lothar Wigger

(Technische Universität Dortmund)
藤井佳世

指定討論者：野平慎二（富山大学）

通訳：山名淳（京都大学）

かつて、フィヒテ(Fichte, J.G.)、ヘーゲル(Hegel, G.W.Fr.)によって展開された承認と人間形成をめぐる問題は、今日、社会哲学者であるアクセル・ホネット(Honneth, A.)によって、新たな視座から取りあげられている。ホネットは、『承認をめぐる闘争』(1992)以後、承認概念を中心にすえた理論的展開を、政治哲学領域において、あるいは、かつての批判理論の再構成として、遂行するなど多岐にわたって進めている。そのホネット承認論は、教育学からみれば、理論と実践という両方をつなぎ、人間形成におけるコンフリクトや異なるステージにおける人間形成を論じる視点を提供しており、非常に興味深い。そこで、本コロキウムでは、ホネット承認論と人間形成論、経験的な人間形成研究をつなぐ研究を進めているヴィガー(Wigger, L.)氏を交えて、承認論を人間形成という視点から読み解くことを目的とする。ヴィガー氏の報告予定内容は、次のとおりである。近年、ドイツの教育科学において活発化している承認をめぐる議論をふまえ、まず、コミュニケーション理論における承認論の不十分な点を指摘し、ジープ(Siep, L.)によるヘーゲル承認論のアクチュアル化を参照することによって、承認論の批判的考察を進めていく。そして、人間形成論と経験的な人間形成研究にとって、新たに浮かびあがる承認論が論じられる。ヴィガー氏の報告は、承認論の理論的可能性だけではなく、学校や教員養成という実践領域への可能性をも開くであろう。本コロキウムでは、ホネット承認論は教育理論に何をもたらすのだろうかという考察を通して、承認論と人間形成の出会いをテーマとした活発な議論をしたいと考えている。

教育学のカノンとしてのデューイ

—過去・現在・そして未来へ—

企画：古屋恵太（東京学芸大学）
岡部美香（京都教育大学）
高柳充利（信州大学）司会：岡部美香
高柳充利報告：松下良平（金沢大学）
龍崎 忠（岐阜聖徳学園大学）
國崎大恩（大阪工業大学・非常勤）

指定討論者：古屋恵太

近代教育思想史を思い描くとき、扱われるべき思想家のリストからデューイを外してもよいと考える者はいないだろう。だが、デューイというカノンとは一体何を意味するのか。本コロキウムは、教育思想史学会の会員が多く賛同者として関わる、デューイ著作集という新たな翻訳の出版に向けた作業が起点となっている。この作業の出発に際し、本コロキウムでは、次のような研究上の課題を確認し議論したい。

1. 日本ではデューイがどのように教育学のカノンに加えられていったのか（或いは、その過程でどのような翻訳がなされ、その翻訳はどのような役割を果たしたのか）、また、2. ポストモダンの文脈における再評価を経た現在、カノンとしてのデューイの実質には研究上、どのような変化が生じているのか、さらに、3. 大学の授業において、デューイはどのように教員によって位置づけられ、学生に伝達されているのか。

すなわち、歴史的、哲学的といった研究上の観点と、教育上の観点からカノンとしてのデューイの特質に迫ることが本コロキウムの目的である。それを通して、デューイ著作集の刊行によって新たにどのような変化が予想・期待されるかを参加者の皆さんと描いてみたい。

教育学的「自律」概念の再検討

企画：関根宏朗（東京大学大学院・院生）

司会：下司 晶（日本大学）

報告：尾崎博美（新渡戸文化短期大学）
小山裕樹（東京大学大学院・院生）
櫻井 欽（日本大学）
関根宏朗

指定討論者：宮寺晃夫（筑波学院大学）

近代的な「自律(autonomy)」概念を素朴に肯定する教育言説はもはや多くはない。そう言いきってしまってもいいだろうか。

近代的理性や主体の虚構性にたいする批判は近年ますます徹底され、それにともないカントが成人性の要件であると名指したはずの「自律」についても、他者性の顕場といったありふれたしかし強靱な倫理的地平からその限界がつけつけられている。

けれども本コロキウムにおいては、それでもなお残されている教育的「自律」概念の可能性を内在的に検討したい。とくに依存(dependence)と自立(independence)という対概念を考察の基点に据え、議論の焦点化をねらう。

具体的には、ケア論の最新の知見から(尾崎)、ドイツ観念論における鍵概念の援用から(小山)、日本近代思想における自己論の一断面の描写から(櫻井)、「強い」主体性論の転倒から(関根)、多角的かつ包括的に「自律」概念を再検討していく。



日本大学文理学部
周辺地図

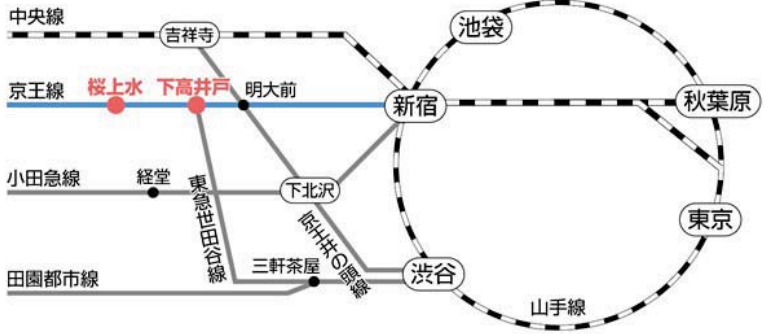
会場案内

教育思想史学会第21回大会
2011.9.18(日)~9.19(月・祝)

教育思想史学会第21回大会・会場


日本大学文理学部・3号館
東京都世田谷区桜上水3-25-40

京王線 下高井戸あるいは桜上水下車、徒歩8分



教育思想史学会事務局
〒156-8550
東京都世田谷区桜上水 3-25-40
日本大学文理学部教育学科 下司研究室気付事務局
E-Mail: hets@chs.nihon-u.ac.jp

第21回教育思想史学会・会場



受付 (3階・エレベータ前)
理事会・編集委員会 (3階・3301教室)
フォーラム/シンポジウム/総会 (3階・3305教室)
コロキウム (3301/3401/3402教室)
懇親会 (1階・カフェテリア秋桜)

3号館



日本大学
文理学部
構内図

※百年記念館は会場ではありません